
~ 8人目の守護者 ~

明華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

〜 8 人目の守護者 〜

【Nコード】

N 9 2 4 3 Q

【作者名】

明華

【あらすじ】

13歳の誕生日。静は通り魔に刺されて死んでしまった！！
死んだはずの静の前に現れたのはKAMISAMA？！
そしてREBON！の世界に転生するお話です。

只今日常編真っ最中です。

くプロローグく

キキ——ッ！！

「ふえ？」

大きなタイヤのきしむ音によって少女は目が覚めた。

（……なんか回ってない？）

少女の乗っていた車は崖から転がり落ちていた。

ゴンッ！

（痛い）

そう思って頭に手を当てるとなにかが手に付いた。

見ると手が赤く染まっている。

（血、かな。）

そのまま少女の意識は深い闇へと消えていった。

(……「じい、どい？」)

気がつくと、少女は白い部屋の白いベットのの上にいた。

頭には包帯が巻いていた。

(病院か。)

個室のようで、部屋には人はいなかった。

しかし、どこからか話し声が聞こえてきた。

(廊下からかな)

「……かわいいそう……。この子……。」

「……6歳……。しよう。」

(私のことかな？6歳だし。でも、かわいいそうって何のこと？)

それまでの会話はなかなか聞き取れなかったが、次の言葉ははっきりと聞こえた。

「両親を亡くすなんて……。」

「……！」

話し声はまだ聞こえるが、その声は耳には入らなかった。

(亡くなった……？)

その言葉が頭の中で響いている。

「静ちゃん、だっけ？も頭を打って重傷だし…。」

「まだ命だけでも助かっただけよかったわね…。」

少女…静の体が震える。

「おかあさん　おとうさん。」

「あら？」

廊下から二人の看護師が入ってきた。

「…!!」

二人の看護師は静の顔を見て驚いた。

何故なら…。

「先生呼んできて。」

「はい！」

一人の看護師が病室から出て行った。

「ちよつとごめんね…」

そついつて一人の看護師が静の右目に手をおいた。

右目だけに…。

（見えない）

ふさがれているのは右目だけ。

左目には何もない。

静の左目に光は入ってこない。

「どうしたんだ…！」

一人の男の人が入ってきて静を見るなり驚いた。

それと同時に右目の手が離れた。

「白い…。」

（…何のこと？）

「左目が、見えないのか？」

うなずく。

先生は悲しそうな顔をした。

静は悲しい顔は嫌いだ。

（自分が悲しいのは仕方がないこと。

だけど、他人が悲しむのは仕方なくないこと。

だから…。）

「先生。私は大丈夫です。」

もちろん、大丈夫ではない。

それは静も先生も分かっている。

「大丈夫なわけな」ちよつとトイレに行つてきます！」おい！」

さつとベットから降りて先生たちの間を通りぬけて病室を出る。

（いや。ほんとに行きたかつたんだもん。）

嘘ではない。本当だ。

しかし、あの場の雰囲気は嫌いということもあった。

「…お母さん、お父さん。」

今はもういない。

「泣くな、私！」

パシンッ！

思いつきりほつぺたをたたいた。

「いったーい！」

はれていないか、と鏡を見ると、静の顔が、左目が見えた。

「！！」

左目は…白かった。

「…ま、いっかな…。」

悲しみにひたつてゐるわけにはいかない。

静が悲しむと、両親が悲しむ。

だから、いいんです。

大丈夫なんです。

だから安心してください。

「お母さん、お父さん。」

くプロローグく（後書き）

はじめまして！

作者の明華です！

こんな私の作品をよんでいただいて光栄です！

何かわけのわからない部分が多々ありますが（国語にがてなんです！）どうぞよろしくお願いいたします！

登場人物紹介！

タニカワ
谷川 静 シズカ

性別：女子

年齢：12歳

身長：156？

体重：38？

一人称：私

髪型：ツインテール（赤いリボン） 黒髪

好きなタイプ：仲間思いな人 やさしい人

嫌いなタイプ：仲間思いじゃない人 自分の命の重さをわかってない人

性格：基本的に「後がよければすべてよし」思考。

成績はまあまあ優秀。

特徴：白い左目（いつもは眼帯でふさいでいる） 右目は黒

「これからよろしくね！」

神様（シノ）

性別：男子

年齢：？歳 何歳なのよ？by 静

身長：165？

体重：53？

一人称：俺

髪型：肩のあたりまででおろしている。金色

好きなタイプ：面白いやつ

嫌いなタイプ：暗いやつ うるさいやつ

特徴：緑色の瞳

つけ足し：神様だよ

「俺、本当に神様だよ…。」

登場人物紹介！（後書き）

こんな感じでございます。

漢字の間違いとか意味のわからないところとかあると思いますが、その辺は我慢してください！（泣）すみません！

その内能力とが少しずつ付けていきますので、よろしく願います！

第一話 レッツ転 生！（前書き）

すみませんでしたあ！！

いきなり間違えてた！『登場人物紹介！』で！

静の髪の毛の色を書いてなかった。もう直しました！
すみませんでしたあ！！

第一話 レッツ転生！

side 静

「…寒いな。」

当たり前。今は2月だもん。

「はあ、あれからもう7年か。」

私は今日で13歳。早いなあ。

「ハッピーバースデー…かな。」

ハッピーはたぶん抜けるけど。

どうせだれも祝ってくれないしね。

…ケーキ買って帰ろうかなあ。

「うらああああ!!」

「へ?」

何?なんか全身黒い人がこっちに包丁向けて走って…包丁?!

グサッ

「……っ」

お腹のあたりが痛い。

刺されたな、私。

地面が赤く染まってく…。

血、か…。

死ぬのかなあ、私。

まだ死にたくない。7年前に約束したから。

『私が悲しんだらお母さんとお父さんも悲しむ。だから私は…この世界を最後まで幸せに生きる！』

…約束、守れなかった。

「ごめんね…。」

そっちに行ったらお母さんとお父さん、いるかなあ？

私が行ったらきつと悲しむだろうな。

…眠いや。

おやすみ。

s i d e 神

今、俺の前には今年100人目の死者がいる！！

寝てるけど。

え？なぜ今年100人目の死者がいるかって？それはだな、こいつを「転生」させるためだ！

なぜ転生させるかって？

そういうルールがあるんだYO！

…えっとこいつが目を覚ます前にいろいろ調べとくか。

データはつと…。今どき紙のデータってなあ。コンピューター買おうかな？

「名前：谷川 静

年齢：13歳

性別：女

死因：通り魔に刺された。

6歳の時に車が崖から落ちて両親と左目を失う。」

…眼帯してる理由つてめを失くしたからか。

哀れな死にかただなあ…。

…6歳から一人暮らしつてすごいな！

「……ん。」

あれ？起きたつばいかな？

s i d e 静

ここ…天国かな？それとも地獄？

確か『家庭教師ヒットマンREBON!』で読んだ話だと、人は死んだら6つの世界のいずれかにいくんだっけ？

ここは6つの世界のどの世界だろう？

「ここは6つの世界のどこでもない。言うならば、6つの世界の「狭間」だ。」

「だれ?!」

いたのは…同じ歳ぐらいの男子。

髪の毛金色！目の色緑！外国人？

「俺は外国人じゃない。神様だ！」

「は？神様？て言うか心読んだ？！」

「心ぐらい読めるぜ。神様だもん。」

「わー！私は信じない！これなんなんだあー！！！」

もうパニック

「信じろよー」

「じゃあ、自分が神様だつていうことを証明してみせてよ！」

「わかった！お前の望みを言ってみろ！」

あらら。向きになっちゃったのかな？笑えるYO！

「じゃあ私の身体能力を最強にして『家庭教師ヒットマンREBON！』の世界に転生させてみてよー！」

…実は、さっき聞こえてたんだよね。この人が私を「転生」させて言ってたの。その時から決めてたんだよね、『家庭教師ヒットマンREBON！』の世界に行くって！

「よし、わかった！今から転生させてやる！転生できたら信じろよ！」

「もっちろん！」

最初から信じてたけどね。あ、心読めるんだっけ？ま、いつかここまで言っちゃったらね。後には引けないでしょ。

「せいぜいセカンドライフを楽しむんだな！

レッツ転 生！」

まだ聞きたいことがあったんだけど…。

ま、いつか

第一話 レッツ転 生！（後書き）

あと2年で私は受験生か…。
がんばろう。

高校どこ目指そうかなあ？

今はとりあえずクラブを頑張るところ！

とか思っていたりする。（笑）

皆さんも頑張ってください。

私もがんばります。

第二話 並中の転校生

side 静

気づいたら、どこかの家の部屋に立ってました。

……この家見たことある。

わかった！私の家だ！↑忘れるなよ（・。・；

本当にREBON！の世界に転生したの？

「ちゃんと転生したZE！家ごと転生したんだYO！」

なんか変なテンションだよ、神様。

て、いうかいつからいたの？

「お前を転生させた時についてきた。て言うかお前、俺をはめたな。」

「……はめられるほうが悪い。（ボソッ）」

「ばっちり聞こえてるんですけど……。」

「だってああでもないし身体能力あげてくれないでしょ？」

「うっ（――・。・）」

神様は私の作戦にまんまとはまった！

「お前、ずる賢すぎ！怖い……。」

「エヘッ（*^|^*）よく言われる」

そういえば、ずっと気になってたけど、私が今着てる制服って、並中の制服じゃ……。しかも半袖。

「あ、お前今日から並中に転校することになってるから。

あと、今この世界では6月だよ。」

へえ。だから半袖か。

「はい、これカバン。中身はちゃんと入れたから。おまけつきで。」

おまけ？

「それより、早く行けよ。もう8時20分。」

へ？　ちなみに予鈴は？

「8時25分。あと5分だな。」

「マジで！（*|^|^*）行ってきます！」

そういつて私は家を飛び……出さなかった。

「……並中ってどこにあるの？」

「あ、そうだった。今日は俺も行くから、ついてこい！」

あれ？いつの間にか、白い布みたいだった服が、鼠色のフード付きパーカーとジーンパンになってる。フードないと目立つよね、君。その金髪。

「了解！」

それでやつと家を出る。↓猛ダッシュ↓並中着8時24分

……身体能力って大切だよ。うん。今日学んだこと。

「失礼します！」

しよ、職員室についたあ。つかれたあ。

神様は門に入る前に煙になって消えたし。

「今日から転校してくる谷川 静です！」

すごいハアハア言ってるよ、私。

「谷川、待ってたよ。君の教室は1 - Aだ。ついてきなさい。」

「はあい！」

1 - A ってことはツナたちと同じクラスかな。

生で見るのが楽しみです！

「ここだ。呼んだら入ってきなさい。」

「はい！」

先生が入って行った教室には楽しいけど、色々な事件が待ち受けているのかな。

s i d e ツナ

……なんか今日はみんなそわそわしてるような気がする。

気のせいかな？

「今日さ、うちのクラスに転校生が来るらしいぜ。」

「マジで！楽しみだなあ。」

あ、それでそわそわしてたのか。転校生ってどんな子だろう。

女子かな？男子かな？怖い人だったらどうしょー!!」

キーンコーンカーンコーン……

あ、チャイムだ。

「席につけー。」

あ、先生だ。

皆まだそわそわしてる。

「えー、今日から我がクラスに転校生が来る。」

待ってました！とか思ってたのかな皆。

「入ってきなさい。」

入ってきたのは、女子だ。

黒く腰のあたりまである髪の毛を赤いリボンでツインテールにする。

左目に眼帯してるけど、なんかあったのかなあ？ にしても…

「「「「「「「（かわいい／＼／）「「「「「「「

クラスの男子全員の心の声が、そろったような気がする。

side 静

「谷川 静です！よろしくお願いします！」

必殺！『営業スマイル160%！』

第一印象は良くなっちゃね！

……あれ？男子何人が鼻血だしてるけど。何かあったのかな？↑あなたが原因ですよ。

あ、ツナ発見！あの髪形はすごいよね！どうやってるんだろう？

山本も発見！あれ？顔が赤いような……。そういえばツナも。

風邪気味なのかな？↑だから、あなたが原因。

「えー谷川は沢田の隣だ。あそこな。」

ラッキー あ、もしかしてこれって神様がしたのかな？ま、なんでもいっか。

「よろしくね、沢田サン！」

……近くで見るとちょーかわいいんですけど！

「よ、よろしくね谷川さん。」

「あ、私のことは静でいいよー！」

「え、う、うん分かった。し、静も俺のことツナって呼んで。」

沢田 綱吉でツナ。」

ビックリ！ツナって意外と勇気あるのね。そんなこと言えないと思
ってた。ごめんっ！

「うん。わかった、ツナ。」

……なんでだろう。周りの男子のツナへの目が怖い。

今日はREBON!の世界に転生したんだ。

ツナと仲良くなれたよ！

獄寺の姿は見えてないから、原作始まる前かな？

これから毎日が楽しみだよ！

私、もう悲しくないよ。

大丈夫だよ！

り

お母さんとお父さんへ

静
よ

第二話 並中の転校生（後書き）

静は結構かわいいんです。クラスの男子が鼻血出すほど。（笑）
実は、女子の中でも、あの子モデルみたいと思ってる子がいたり
して（笑）

……眠いです。

明日学校あるんでもう寝ます。

お休みなさい。

皆さん、いい夢を…… Z Z Z

第三話 What? (前書き)

言い忘れてました。

私は、漫画派です。

そこらへんは、ご了承ください！
アニメ派の皆さま！すみません！

第三話 What?

side 静

えっと、確か今は一時間目の真っ最中。

なのに私は今屋上にいますYO。

……私がさっきまでいた場所に小さなクレーターができてるYO！

トンファーでクレーターを作るって……。

あ、もう分るよね。私の目の前にいる人。

「咬み殺す……！」

雲雀 恭也サンです イエーイ♪

く回想 昨日の昼休みく

お弁当なかったので購買で焼きそばパンを買いました。

で、どこで食べてるかというところ…。

「着いた！屋上！」

並中に来たら一回は来たいよね、屋上！

誰がいるのかな？……誰もいないし。

何でかな？ ま、何でもいいけど。

「いっただっきまーす！」

もぐもぐ

あ、この焼きそばパン美味しい！

もぐもぐ

あー幸せ

もぐもぐ

バンッ！

もぐ、ゴホッゴホッ！

すごい勢いで屋上の扉がぶっ飛んだんですけど……。ゴホッ。むせた。
て言つか誰？

あ、何でかな？こっちに来る。いやな予感が……

予感的中。

「君、そのリボン校則違反だよ。……咬み殺す！」

雲雀サンでした

って、トンファー危ないって！

「ワオ、今のをよけるんだ。」

「ふあふあいひやふあいふえふふあ！」

……焼きそばパンが口の中にあるんだよ」

「ふざけてるの？」

雲雀サン！黒いオーラがでてますよ！殺気をださないで！

「ゴホッ……あなた誰ですか？何で私は初対面の人に殺されかけてるんですかぁ！」

誰かは知ってるけど。

「……僕のこと知ってるよね。」

「ふえ？ばれちゃいました？」

「顔にでてるよ。」

ま・じ・で！これからは気をつけよう。

「じゃあ、初めまして雲雀サン！

私は転校してきた谷川 静です！よろしくお願いします！
それでは急ぐんで、失礼しましたぁ！」

「ちよつと待ちn……！」

ガシャ

ヒュー

ストッ

……説明すると、

ガシャ↑屋上のフェンスを登る音。

ヒュー↑落ちてる音（！）

ストっ↑着地した音

身体能力最強って素晴らしい！

あ、もうチャイム鳴る。

教室戻ろう。

——翌日、朝

キンコンカンコン……

今日は、余裕もってこれたYO！

「席につけー。出席とるぞー」

……皆意外と返事するもんなんだなあ。

「沢田。」

……

あ、今日ツナいないんだ。つまらないなあー。

「谷川。」

「あ、はー……」

バキッ

「い？」

ドアつぶれたあ。先生とか皆冷や汗かいてるし。

て、ことは……。

「谷川 静。ちょっと来て。」

雲雀サンでしたあ

く回想 終く

長々とサーセンm(――)m

と、いうか

「殺さないでえ！」

なんちゅうことを叫ぶんだよこの中学生(笑)

「……咬み殺す」

「きゃあああああ！」

間一髪でよけたけど、危ないって！

……いつけなーい

攻撃しなくなってきた ↑ オイ！

もともと喧嘩はよくしてたんだよね。

短気なんだよ私。

……てことで、

↓ 静八雲雀サンノウシロニマワリコンダ。

↓ 静ハドウスル？

・パンチ

・キック

・ニゲル

……キック

「やあ！」

スカッ

やっぱりよけられるよね。

え？ミニスカでキックって大丈夫かって？

……体操ズボンはいてるよ。

「ワオ！僕に向かってくるなんて面白いね、君。」

「そりゃどーも。」

うれしくないけど。

あーあ、怒らせちゃったかも。

後悔はしない。逃げる準備しよう！

「逃がさないよ。」

ゲッ。また顔にでた？

ヒュッ

プシッ

「!!!」

よけたつもりなのに……あ、トンファーから仕込み針が出てる！

ずるいって！私も武器だそうかな……。確かあれは、ポケットの中かな？

って、うわっ！来たあ！

ヒュッ

ガキンッ

「!!!」

「ふー。危なかった。」

カバンから、おまけを移しといてよかった！

カバンの中に入れたままだったら、使えなかったもんね♪

「何？これ。」

「私の武器、棒ロッドです♪」

棒が役に立ったよ！ありがと、神様！

「この棒はね、5?から3mなら自由に長さを変えられるんです!」

雲雀サンのトンファーみたいに仕込みはないですけど。

にしても、私ってこんなに力あつたっけ?

私、棒を片手で持つてるけど、それで押してるような…。

スッ

「おわっ!」

いきなりトンファーさげるから、ビックリしたじゃん!

「君、風紀委員の書記にならないかい?」

What?

「書記になったらそのリボン、付けてていいよ。武器も。」

チャキ

……それってもう、強制的に入れて言ってるようなものだよね。
トンファー構えてるってことは。

「わかりましたよー。入りますよー。」

「じゃ、これに名前書いて。」

……どっからそんな書類だしたのよ。

それは置いといて、なにになに？

『私はこれより、無期限で風紀委員に入ります。』

名前

『

……無期限ですかあ————！

第三話 What? (後書き)

棒は、ただの長さが変わる白い棒です。模様も飾りもなし。さて、これをどうやって使うか……。

あ、神様、棒を大量に生産しててくださいね
よろしく!!

神 「ええーーーーー!!」

第四話 リーゼントサン（前書き）

なんなんだこのサブタイトル！
もうちょっとましなのをつけようよ。
って思ったあなたは正しい！！

第四話 リーゼントサン

「名前書いたんで、教室戻っていいですか？」

「……放課後屋上に来て。」

「エー……。わかりましたあ！すみません！」

え、何で叫んだかつて？

雲雀サンからすっごい殺気がでてるんで。

「失礼しましたあ！！！」

全力ダッシュ

ガラガラ

ひっさしぶりの教室

いつの間にかもう三時間目だYO！

「谷川さんが帰ってきた！」

「無事だ！よかった。」

「にしても、すごい音なってたよな。」

……当たり前前の反応ですね！

休み時間は気をつかってか、誰も寄ってこないし。

「谷川さん……。」「

前言撤回

話しかけてくる人いました。

「えっと、吉田 風華サン……だっけ？」

席が後ろの。

「これ、使つて。」

へ？バンソーコ？

あ、うでから血でてた。

すっかり忘れてたぜ

「ありがとう！」

「大丈夫だった？」

「うん！大丈夫じゃなかったら、今頃ここにはいないよ！」

「あ、そっか。よかった。」

で、放課後。

いきなり飛んでサーセン」(・|・)――

あ、昼食はおいしかったぜ！カレーパン！

「失礼します」

屋上の扉を開くと、

「……………」

リーゼントサン達がきちつと整列シテマシタ。

「失礼しました……………」スミマセン。」

雲雀サン、無言の圧力、強烈です。

「で、何か用ですか？」

「皆に紹介してもらおうと思ってね。」

皆って、風紀委員の人たちですか。

「じゃあ、書記が来たから、僕は帰るね。」

……屋上から飛び降りるって、危ないんだよ。

よい子も悪い子も真似しちゃだめだよ。

自己紹介したらいいんだよね。

「このたび風紀委員の書記になりました！」

11A 谷川 静です。 よろしくお願いします！」

ぎこちない営業スマイルでああ！

……皆さん無言ですかい。

「えっと、帰っていいですか？副委員長さん？」

草壁さんは、近くにいましたよ。

「あ、はい。」

「それでは。さようなら。」

回れ右！&全力ダッシュ

だってリーゼントだらけの中にいるの、やくざに囲まれるより怖いよ！

……階段10段以上飛び降りた気がする。

今日は雲雀サンに風紀委員にはいらさ「……風紀委員に入りました。

しかも書記です！やばいって！

でもまあ、今日も楽しかったです

お母さんとお父さんへ

静より

……翌日

今、昼食中

クラスの皆が（ツナ以外）私が風紀委員に入ったことを知ったよう
でございまして。はい。

私に近づかなくなったYO（@|@。

ツナともう一人を除いて。

「沢田ってもう帰ったのかな？」

「そうなんじゃない？カバンないし。」

あ、私の昼食は焼きそばパンね。

え、そんなのどうでもいいって？

……すみません。

で、一緒に食べてる人は、

「ねえ、風華って私のこと怖くないの？」

「へ？何が？」

何が？って……。

この子は怖いもの知らずか？それとも天然？

「あ、今私のこと馬鹿にしたでしょ。」

「へ？もしかして顔に出てた？」

「うん。もつのすぐく。」

「……ごめんなさい。」

「別にいいよ。」

「そうだ！今日ひま？」

「んー、暇って言ったら暇。」

「じゃ、並盛町を案内してあげる！」

「本当？実は本屋とか行きたかったんだけど、道に迷っちゃって…。」

あの時は本当にヤバかった。

放課後だぜい

「ここが並盛商店街！」

「わぁ！お店がいっぱいならんでるね！」

「ここが本屋さん。で、あそこが…。」

あ、あそこは…

「『ラ・ナミモリーヌ』!!」

うわさのケーキ屋さん!

「ケーキ食べよ!」

「うん!」

「いらっしやいませー!」

「うわーいろんな種類があるー!」

迷うー。

「風華は何にする?」

「モンブラン!!」

「じゃ、私もモンブラン。」

「モンブラン2つですね。かしこまりました。」

「今日は色々ありがとう、風華！」

「いえいえ。またケーキ食べようね！」

「うん！あ、そうだ。メアド交換しよ！」

「いいよ！」

……登録完了♪

今日は新しい友達ができたよ！

吉田 風華っていう子！

ちょっと天然だけど（．．；一緒にケーキ食べたんだ。おいしかったあ！

今日も一日楽しかったです！

お母さんお父さんへ

静より

第四話 リーゼントサン（後書き）

えっとね、学年末テスト一週間前

だからパソコンいらせる！

っていう考えと

だから勉強しろ

っていう親の声が

皆も頑張ってください。色々。

第五話 原作が、始まった！

side 静

私が今いるところ？

夢の中だよ

で、目の前にいるのは、

土下座をしている神様（笑）

なぜ、こうなったかというと、

「あれー、何故かなあ？私の攻撃力が上がっているような気がするんですけどお？

何故でしょうねえ？ね、神様？」

「スミマセンスミマセンスミマセン」

みたいな感じ

「……………何で？」

「じ、実は俺の失敗で、あなた様の身体能力と一緒に攻撃力も最強に……………」

「……………そういうことね。」

じゃないとありえないよね。雲雀サンに力勝負で勝ちそうになるなんて。

あつれえ？いつの間にか私の右手には棒が

いつからだろお？↑おい。

なおしとこ。

「あ、それと、何で昨日、夢の中で会えなかったの？」

「用事があって……。スミマセン」

うつわ、神様に土下座されるって変な気分だわ。

「そつえば、名前ってなんていうの？」

なんか神様、神様って呼ぶの疲れた。

「……ない。」

「じゃ、シノで。」

「シノ？……わかった。」

ピピピピピピ……

何の音だろ？

「あ、目覚まし時計の音か。」

「へ？まだ4時だろ？」

「風紀委員に入ったからね。

昨日は普通に学校行っただけど……」

（回想）

昨日（今日）のこと。

「ばいばーい！」

「また明日、風華。」

……。

後ろの視線が気になるよ。

「あの、用があるなら出てきてください。」

「気づいてたの？」

はい、雲雀サンですね

後ろからついてくるなんて……。

ストーカーかい、あなたは。

「で、用は何ですか？」

「今日、学校に来るの遅かったよね。」

遅刻はしなかったけど……。

「風紀委員は6時には学校に来て、見回りだよ。」

「？えっ！」

く回想 終く

「つてことがありますて。」

「……大変だな。」

「あの後、咬み殺されそうになって……大変だったんです。」

昨日は初めてだったから許してもらったけど。

「じゃ、行ってきます。」

「がんばれ。」

ピピピ……カチッ

「ふぁー。4時起きはきつい。」

早く行こう。

怒られると、怖いよー。

只今の時刻、早朝5時。

のくせに、ここ並盛中学校の校舎には20人ぐらいの生徒がいたりする（笑）

「ワオ、今日は早かったね。」

「……眠いです。」

「じゃ、見回り行つて来て。」

「了解シマシター。」

「おはよ。」

気づけば8時。疲れあー。

あれ？何か教室が騒がしくね？

「おっはよー、静！」

「おはよ風華。何かあったの？」

「それがさあ、昨日沢田が笹川さんに告つたらしいよ！」

「!?!」

……原作が、始まった！

今ね、皆で道場に来てるの。

理由はわかるよね。

「きやがったな変態ストーカーめ!!」

お前のようなこの世のクズは神が見逃そうが、この持田が許さん!!

成敗してやる!!!」

ツナVS持田センパイ!

結果は知ってるけど見ものだよー。

「商品はもちろん、笹川 京子だ!!!」

うっわ、ひど。

あのセンパイ最低、ゲス。

って、ツナがいないし。

「む? 沢田は?」

あ、ゲスも気がついた。

「トイレに行きたいというのでいかせました。」

………てことは。

「逃げたな…あいつトイレ逃走^{エスケープ}多いから。」

だね。

「な、なんだと…！」

これで不戦勝だ！！京子はオレのモノ！！ギャハハ」

……ゲスにもほどがあるだろ。

s i d e ツナ

オレは道場を出て、廊下を歩いていた。

またオレのダメ人生に新たな歴史がきざまれた。

「まっ、でもいいや。どーせ勝てねーもん。」

センパイに勝てっこないし。

帰ろっかな……。

シュッ

「！」

ズザザザ

あ、足がひっぱられるー！

ピシャッ

side 静

「もう教室戻ろうかな？」

「あいつもう帰ったんじゃないか？」

「いや、来るよもうすぐ。」

「どうする静？ 私たちも帰る？」

「まあまあ風華。そう言わずにもうちょっと待っててよ。」

「う、うん。」

……来た！

ダンッ

「いざ！勝負！ー！」

「ほら、来た♪」

皆驚いてる

「お前の防具はコレ」「うおおおおお!!!!」「」

まさかの防具ナッシング！

ま、あんな重いやつ着てたら絶対不利だけど。

「ギャハハハ！裸で向かってくるとはブアカの極みだな!!!!」

ブアカはお前だよ。

「手かげんするとも思ってたか!!
散れ!!カスが!!」

バチイッ

うつわー。竹刀がツナのおでこにヒット

いい音なった♪

だけど、

ゴッ

もつといい音なったあ♪

ナイス頭突き！ツナ！

皆唾然としてる♪

ドカツ

ツナがゲスの上に乗ったあー！！

「何をする気だ！！？」

ツナが右手を挙げた！！

「手刀だっ！面を打つ気だ！」

いえいえ、違います。

「うおおおっ！」

ベリ

「ぎゃっ」

再びシーンとなる道場。もー私、笑いこらえるのに必死！か、肩が震える！

「１００本！！とったーっ！」

ゲスの髪の毛１００本、とったーっ！

ナイス！ツナ！

「考えたなツナの奴！

確かに何を一本とるかは言っていなかったもんなー！」

本当に笑える！！ざまーみるゲス！！

「これでどーだあ！」

「ひいつ！」

あーあ。赤をあげときゃいいものを。

赤あげないから……

「うおおおおっ！」

ブチブチ言ってるうー（笑）

「全部本」

「赤！」

こうして、ゲスはつるっぱげになり、この勝負はツナが勝ちましたとき

第五話 原作が、始まった！（後書き）

原作がやっと始まったあ！

静は相当、持田センパイのことが嫌いなようですね！！

皆も持田センパイのようなゲスにならないよう気をつけてね（笑）

第六話 ボンゴレファミリー（前書き）

やっと、学年末テストが終わってから時間ができたああ。

つらかった。パソコン使えなかった。泣

そして、親に言われました。「会話文、多!!」

……スミマセン。努力します。

第六話 ボンゴレファミリー

side 静

いやー、今日は朝から面白いものみれたなあー

いや、今放課後ですが。何か？

「じゃあまた明日！」

「ばいばい！」

ツナも嬉しそうだね。あたりまえか。好きな人を守れたんだから（笑）

「今日の沢田、すごかったねえ。なんか荒々しかった。」

風華サン、ツナを甘く見てはいけませんよ。これからだから（笑）

「あ！今日は塾があるんだった！早く帰らないと……ごめん、静！バイバイ。」

「バイバイ。塾がんばってね。」

……風華って、おっとりしてるように見えて、運動神経抜群なんだよな。

さて、私も帰ろうっと。

「ただいまー。」

「おつかえりー。」

何故かな？リビングから声が……

「……なぜそこにいるの？シノ。」

「暇だから。あ、晩飯つくったから食べようぜ。」

前は忙しいって言ってたよね。ていうか、つくったって……。

「いい匂いしてますけど、何ですかー？」

「カレーライス。どうせお前、最近パンかコンビニ弁当しか食ってないだろ。」

ギクッ

「料理するのが嫌なのはわかるが、ちゃんと栄養とれよ。」

べ、別にコンビニ弁当だって栄養あるじゃん！

それに、料理しようとする、体が拒否するんだもん。

……包丁見たとき。

「プラスチックの包丁（子供用）買ったから。包丁克服しろよ。」

「うん……。」

刃物には慣れとかなないと、これから大変だもんね。

「さ、食べようぜー！」

「うん。」

「んー、おいしー！シノって料理上手だね。」

そう！いま私は、シノがつくったカレーライスを食べている！（なぜかシノも。）

「そりゃ、いつもつくってるしな。」

……自分でつくるんかい。かわいいぞ。

ドカンッ

「ドカンッ？」

外からすごい爆発音が…爆発？

「この辺で爆発する家といえば…」

ガチャ

あ、おむかいさんから煙が出てる。

そっぴゃあ、あいさついつてないな！

あれ？なんか浮いてる。赤ん坊？

じゃあやっぱり…

「ツナ？」

「へ？あ、静！」

つぶれた2階から顔を出した。

「静の家って向かいだったんだ！」

「びつくりしたよ。家の事と、爆発のこと。」

いったい誰がなおしてるの？

s
i
d
e
≡
人
称

静は、ツナがけがないと知ると、家に帰って行った。

赤ん坊…リボーンもツナの部屋（壊れた）に戻った。

「ツナ、さっきの女はだれだ？」

「さっき？…静のこと？」

不意に聞かれて驚いた顔をするツナ。

「谷川 静って言って、最近うちのクラスに転校してきた子だよ。」

壊れた家の片づけをしながら答える。

そんな様子をいつの間にかいれたエスプレッソを優雅に飲みながら
見守るリボーン。

（谷川 静…。あいつ向かいの家で爆発がおきたというのに、あま
り驚いていなかった…。

普通はなぜ爆発がおきたかとか聞くはずだが…。）

「調べてみるか。」

そんなリボーンの囁きはツナには聞こえていなかった。

s i d e 静
ピンポン

「はい。」

誰だろ？

ドアの向こうにいたのは…

「ちゃおっす！」

……。

「どうしたの？迷子？一緒にお母さん探してあげようk」「ふざけるな。」「…何の用ですか？呪われた赤ん坊のリボンサン。」

今たぶんだけど、まゆ毛がぴくって動いたよ。

「どこでそれを…。」

「うーん。この世界に来る前？」

嘘ではないよ。うん。本当に。

s i d e リボン

「それより銃をおろしてくれませんか？」

「！-！」

こいつ…少しだが殺気を放ってやがる。
おもしれーな。

「お前、ボンゴレファミリーに入らないか？」

銃の姿だったレオンを元のカメレオンの形にして、帽子の上に乗せた。

「え！ボンゴレファミリー！？」

こいつ、ボンゴレのことを知っているのか？

「入りたい！ぜひ入れてください！」

満面の笑みで言う。

「ニッ。じゃあ、またな。」

「はい。あ、ボス……ツナにはまだ私がボンゴレファミリーに入っ
たってことは言わないでくださいね。」

「ああ。」

そう言ってリボーンは沢田家に帰って行った。

今日は原作が始まったよ！

ツナの死ぬ気を始めて生で見た！

そんなツナの家はお向かいでした。びっくり！

そして私は、ボンゴレファミリーに入りました！イエーイ！！

……大丈夫なのかああああ！！！！これって原作壊してるくね？
ま、いっかな

もう入っちゃったもんは仕方ない！

ぶっ壊しちゃえ

これからどうなるんだろう？楽しみです！

お母さん　お父さんへ

静

第六話 ボンゴレファミリー（後書き）

……風華の設定を入れるのを忘れていた。ここに入れます。

名前：吉田 風華（ヨシダ フウカ）

性別：女

年齢：12歳（現在）

身長：149？

体重：36？

一人称：私

髪型：ひじ辺りまででちょっとウェーブがかかっている。茶色。

眼の色：黒

性格：怖いもの知らず。雲雀さんもあまり怖がらない（笑）

付け足し：これでも体育委員

……こんな感じです。

いきなりですが、皆さんの好きな曲は何ですか？

教えてください！できればREBORN！の曲で！

そのうち出る(かも)

第七話 バレーボール（前書き）

更新遅れてすみません！！

今回はちよつとずつ書いてたので遅れました。

本当にすみません！！

あと、今回から本文の書き方を変えてみました。

どちらが良かったか教えてくれたらうれしいです。

それと、REBORN！で好きな曲はまだまだ募集中です！！

答えてくれた皆様、ありがとうございました！！

これからこんな私をよろしく願います！！

第七話 バレーボール

おはようございます！

ただいま、朝の3時でございます。

へ？言葉が変？…だって眠いんだもん。

じゃあ、こんな時間に起きるなって？

……それは正しい意見だよ。

でもね、起きちゃったんだよ。

正確にはね、起こされたんだよ。

「早くしなよ。」

雲雀サンに

なんでかって？

それはこっちが聞きたいよおおお！！

ピンポン

「……ん？」

今の時間は朝の2時半。

こんな早い時間に人の家のインターホン押すのはやめてください。

だれか知らないけど。

そんなことを思いながら、静は眼帯をして玄関を開けた。

その先にいたのは、

「遅いよ。」

「いやいやいや、まだ2時半ですし。こんな朝早くに何ですか？雲

雀サン。」

制服姿の雲雀が不機嫌そうに立っていた。

「…………行くよ。」

…………で、今にいたる。

静が制服に着替えると、外からエンジン音が聞こえてきた。

見ると、雲雀がバイクに乗っていた。

「乗って。」

静は雲雀の運転するバイクに乗って、どこかへ向かっていた。

どこ行くんだろ？て、いうか……

「本当に中三ですか？」

「学年なんて関係ないよ。」

さいですか。

静はバイクに乗りながら、改めて雲雀の怖さを実感していた。

「雲雀サン。今、ノーヘルです。結構スピードでてるんですけどおおー！！」

何で捕まらないんだ？この人おおー！！

「着いた。」

朝早くからバイクに乗せられ雲雀につれてこられた場所は……

「神社？」

一体ここで何を？ 暗いし。

雲雀はいつの間にか木の上に登っていた。

静はどうしたらいいのかわからなかったので、とりあえず登ってみた。

「なんでここに来たんですか？」

「……見て。」

雲雀が指を指した方向を見ると……

「わあああ！！！」

ちょうど日の出だった。

「きれー！！！」

子供のようにしゃぐ静を雲雀はあきれたような顔を見ていた。

「どうして連れて来てくれたんですか？」

「……何となく。」

そうですか。

「ありがとうございます?。」

「何で疑問形なの?。」

「さあ?。」

ハハハッと笑い飛ばす静。

「ハア。学校行くよ。」

そう言つて雲雀は木から飛び降りた。

「はい。」

もうちょっと見たかった!と思いながら静も木から飛び降りた。

そして……

「ヘルメット、プリーズ!。」

バイクで登校しましたとさ

今、静はとてつもなくふらついていた。

もちろん、眠いからだ。

早退して家で寝ることもできるが、帰るわけにはいかない。

なぜなら……

「なあ、たのむよ たのむ！

どーしても勝ちたいんだ！」

→この人は何でどーしても勝ちたいのでしょうか？

正解は、バレーボールです！

一人の生徒が手を合わせて頼んでいる相手は、ツナ。

「わかった まかせとけて！」

ガッツポーズ

ピッ

バレーボールの試合が始まる。

静は風華と一緒に試合を見に来ていた。

ツナはコートの中にいる。

顔色がものすごく悪い。

何故か？

ほら、あれだ。

頼りにしていた『死ぬ気弾』が使えない。というアクシデント。

理由←

死ぬ気弾は撃たれた時に後悔がないと復活しないんだ。b y r i ボー

ズム

「んがっ」

ツナの腹にボールがヒットした。

「……ワオ。」

「どうしたんだろ？ 沢田。剣道（？）の試合の時とは大違いじゃん。

」

だって、ねえ？

その後もツナはヘマをしまくって、とうとう……

「オレたちやマジでやってんだよ!!」

「やっぱりおまえはダメツナだな!」

チームメイトに切られた。

ピッ

「第一セット終了」

ツナはもう疲れきっていた。

「あの……。ちょっといいかな。」

ツナがそう言うとチームメイトににらまれた。

ツナはおずおずと右手で頭をかきながら言う。

「実は、持田センパイとの一戦で足をくじいてたんだけど、また痛みだしてきちゃって……。」

そう言うと、チームメイトは驚いて、

「えっ、マジで?」

「だから調子悪かったのか。」

と心配してくれた。

そしてツナは保健室に行こうとした。

正確には、家に帰ろうとしていた。

ツナが体育館を出ようとした時、チームメイトがけがをしているのにきずく。

『どーしても勝ちたいんだ!』

『オレたちやマジでやってるんだよ!』

そんな言葉を思い出した。

バシヤ

ツナは体育館を出てから家に帰らず、水道で顔を洗っていた。

「帰んねーのか？」

「ああ。」

いつの間にか現れたリボンに「じゃあな」と言って、ツナは体育館に向かった。

恥ずかしいや。

ツナはそう思いながら体育館の中に入った。

「ツナが戻ってきた！」

誰かがそう言っていると、皆がツナのほうを向いた。

やるだけやって……終わったらみんなにあやまろう。

そう思ってコートの中に入って行った。

そのころリボーンは体育館にいるツナに向かって銃を構えていた。

「わかればよし。」

そう言つと、

ドドンッ!!

ツナに向かって二発撃つた。

額ではなく、両太ももに。

ツナがブロックのためにジャンプする。

すると、ツナはネットを越えるほどジャンプした。

静はあれ、何mぐらいあるんだろう？はかりたい！と思いながらツナジャンプを見ていた。

面白いものが見れたので、眠気など無くなっていた。

「なんか最近の沢田ってすごいよね！-」

風華が興奮して言うてくる。

「すごいけど……こわいような気がする。」

「……言えてる。」

今日はバレーボールの試合がありました。

と、言っても私が出たんじゃなくて、ツナが出たんですが^^;
ジャンプ弾を撃たれてすごいジャンプを見せてくれました。
すごかったなあ……

今日も楽しかったです。

お母さん お父さんへ

静

第七話 バレーボール（後書き）

……前回、静が原作ぶっ壊しちゃえ とか言ってたけど、

ぶっ壊すどころか、ほとんどからんでない!!

どうしよう(´・`・´)

がんばります。

第八話 学校爆発！！（前書き）

なんだこのサブタイトル（笑）

今までの付け方と変えたんですけどね、一応。

サブタイトル関係ないし（笑）

第八話 学校爆発！！

ハロー

ハーワーユー？

私？

アイム……びっくり。

あ、日本語じゃん。ていうか、変な発音。

ま、いいか。

さて、アイムびっくりな理由を教えてあげましょう。

……偉そうにしてごめんなさい。

聞いてください。びっくりな理由。

理由はさっきから、目の前で爆発がおこっているからです。

その理由←

今日の朝の１ - Aの教室の様子。

教卓の前には銀色の髪の毛をして、ネックレスを超付けている、いかにも！みたいな不良君。

「イタリアに留学していた獄寺 隼人君だ。」

転校生がきました。

獄寺は、ツナの机を蹴ってから、自分の席へ行く。

そんなことがあったようです。

その間、静は寝てました。

最近朝が早いから。

今日も早くに学校に着きました。

そしたら草壁さんが「今日、委員長は休みです。」と、言いました。

聞くと、病院に行ったそうです。

あの人のことなので、けがでは無いことは確かなので、サボりだと思いました。

て、事で静もサボって教室で寝てました。

そしたらいつの間にか、休み時間になりました。

今日は風華も風邪で休みなので暇です。

暇なので、ふと校庭に出ると、

目の前が爆発しました。

理由終わり。

今から音声をつけてみましょう。

「リ・ボーン復活！！！死ぬ気で消火活動！！！」

すごいなあー。と思いながら静が見ていると、ダイナマイトが5個飛んできた。

「わお。巻き込まれちゃった。」

ツナは他のダイナマイトで精いっぱいの様子。

「フッフフーン♪」

静は鼻歌を歌いながら棒を出し、まだ空中で飛んでいるダイナマイトの導火線だけを棒で切った。

「消す消す消す消す消す消す！！」

大量のダイナマイトの火を手で消していくツナ。

「3倍ボム」

獄寺はそう言うのと、かかるほど大量のダイナマイトに着火した。

しかし、

ポロっ　ポロポロポロっ

ダイナマイトは地面に落ちる。

ジ・エンド・オブ・俺…

獄寺が自分の死を覚悟した時、

「消す！！！！」

「フッフフーン」

ツナは素手で、静は棒で獄寺の周りに落ちているダイナマイトの火を消してゆく。

全てのダイナマイトの火が消えたとき、ツナの死ぬ気タイムが終わった。

「助かった。それより、静！！けがしてない？」

「無傷だよ。お疲れ様、ツナ。」

静はそう言って、棒をしまった。

「御見逸れました！！！！あなたこそボスにふさわしい！！！！」

声のする方を見ると、獄寺が土下座をしていた。

「だってさ、ツナ。」

「ちょっと、静はマフィアの事は……。」

「私もツナがボスにふさわしいと思うな！」

ツナは驚いた。静がマフィアを知っている事に。

それと、ボスにふさわしいと言ったことに。

……とまあ、こんな具合で獄寺がファミリーになった。

べ、別にめんどくさかったわけじゃ無いんだからね／＼！！！！

→すみません。作者が調子に乗りました。

「そういえば、お名前を知らませんでした。」

獄寺が静に聞く。

「あ、そっか。私は谷川 静。静でいいよ。あと、敬語やめてよ。同じ年齢だし。仲良くしてね。よろしく!!」

「分か……った。」

こうして静と獄寺は仲良くなった。

「ただいま。」

返事はない。

どうやら今日は静の家にシノはいないようだ。

晩御飯は何にしようかなと考えていると、携帯が震えた。電話がかかってきたようだ。

風華かなと思つて見ると、見覚えのない電話番号だった。

静は不安ながらも出ると、

『遅い』

一番初めに聞こえてきた声はそれだった。

「……。なんで私の携帯番号を知っているんですか？」

相手はほかの誰でもない、雲雀だった。

『……並盛病院に来て。』

「ちよっ……」ぶちっ

ツーツー

一方的に電話を切られた。

仕方ないので静はそこらへんにあったミカン（シノが買ってきたも

の)を3つほど持って家を出た。

コンコン

「しつれいします。」

「やっと来た。」

そう言つて雲雀は読んでいた本を閉じた。

「入院する必要があるんですか？」

静はそう言いながらミカンを差し出した。

「暇だったんでね。にしても君が何かを持ってくるとは……。」

「すいませんでしたね。リンゴとかじゃ無くて。」

静はそこらへんにあったイスに座り、ミカンの皮をめくり始める。

「別に僕はそんな意味で言ったんじゃないよ。」

「……パイナップルにしとけば良かった。（ボソッ）」

雲雀に聞こえないように小さな声で言っ、むいたミカンを食べ始める。

「で、用は何ですか？」

「今日、学校で何かあった？」

雲雀はミカンを食べながら聞く。

静もミカンを食べながら答える。

「うちのクラスに転校生が来ました。と、いうより気になるなら来てくださいよ。」

ダイナマイトの事は言わなかった。

知られたら咬み殺されるだろう。

風紀委員の人たちにも口止めしておいた。

「ふーん。」

「用がそれだけなら帰りますよ。ミカンも食べ終わっただし。」

「……もう用は無いよ。」

「じゃあ帰ります。お大事に。」

そう言っただけで残ったミカンを置いて、病室を出て行った。

廊下で医者たちが静を見ておびえていたのは気のせいでは無い。

今日は獄寺が転校してきました。

態度の変わりようがすごかった。

ダイナマイトもすごかった。

なんか、病院で視線がおかしかったようなきが……。

なんかこれからさらにドタバタしそうです。

でも、そんな毎日が楽しいし、楽しみです！

お母さん　お父さんへ

静

第九話 主人公、先生にひどい扱いをされたような……（前書き）

またまた更新遅れてすみません！！&変なサブタイトルですみません！！

そしてREBORN！で好きな曲。

しつこいようですがまだまだ募集してます！

今のところ期限というものはないので、よろしくお願いします！！

第九話 主人公、先生にひどい扱いをされたような……

午前六時。

いつものように学校に来て見回りをしている静。

今日は雲雀も来ている。

いつもど通りの平和な並盛中学校。

そんな中で静は悩んでいた。

今日は雲雀がいるのに、学校の校庭が地割れする。標的4の退学クライシスだ。

できれば休みたかったが、そうはいかない。

イレギュラーである静が入ってきて、原作が少しずつ変わってきている。

と言うことは、原作では出てこなかった人物が出てくる可能性もある。

それは、まだ出てこない雲雀がツナたちを咬み殺す可能性があると言うこと。

それを防ぐためにどうすればいいのか、静は悩んでいた。

一方、雲雀が出てきたらどうなるのかと言う好奇心もあったのだが。

「川田。」

「はい。」

今は理科のテストの返却中。

ツナはテストが全然わからなかったので、冷や汗をかいていた。

一方、静は興味がないと言つように、頬杖をついて窓から空を見て、あくびをしていた。

結局いい案が思いつかなかった静は、あきらめていた。

「ぶつつけ本番だ……。」

静はそうつぶやいた。

「沢田。」

「はい。」

ツナがテストを受け取ろうとすると、先生は「ち。」とわざとらしく舌打ちをして、何かを語りだした。

「あくまで仮定の話だが……クラスで唯一20点台をとって平均点をいちじるしく下げた生徒がいるでしょう。

エリートコースを歩んできた私が推測するにそういう奴は学歴社会において足をひっぱるお荷物にしかない。

そんなクズに生きている意味あるのかねえ？」

そう言つてツナのテストをペラッと曲げて点数を見せた。

……26点。

今度ツナに勉強を教えてあげようかな。と、思った静であった。

「谷川……さん！」

「はい。」

さん付けにされたが気にしないでおう。

先生は何も言わずにテストを静に渡した。

ガラッ

静が席に戻った時、教室の後ろのドアが勢いよく開き、一人の生徒が入ってきた。

獄寺だ。

「コラ！遅刻だぞ！！」

先生が注意をすると獄寺はガンをとばして、先生を黙らせた。

そして、ツナと静のほうに近づいてきて……

「おはよーございます10代目！！谷川さん！！」

ピシッとおじぎしてきた。

ツナは迷惑そうな顔をした。

「おはよー獄寺君。静でいいよー。」

静はニコツと笑って返した。

クラスの皆はどーいう関係なんだ！？と驚く。

「あくまで仮定の話だが、平気で遅刻してくる生徒がいるでしょう。そいつはまちがいなく落ちこぼれのクズとつるんでいる。」

なぜなら類は友を呼ぶからな。」

静は少しずつこけた。

おいおい。私も落ちこぼれかい。

「10代目沢田さんへの侮辱はゆるさねえ……！」

先生の首を締めあげる獄寺。

「10代目、落とします？こいつ。」と笑顔で聞く獄寺。

ほっといてくれーっ！と、顔を伏せるツナ。

獄寺。もっとやれ……！！と先生をにらむ静。

静さんは根に持つタイプらしいです。

「貴様ら退学だー！！！！」

校長室にひびく声。

ツナと獄寺は退学になりかけていた。

静は巻き込まれなかったので、校長室のドアの前で聞き耳を立てていた。

そろそろ雲雀サンを探そうかな。

ということ、雲雀探しにでた静。

すぐ見つかった。

「何？」

雲雀は屋上で寝ころんでいた。

「僕の眠りを妨げるとどうなるか知ってるの？」

チャキ……

トンファーを構えてきた。

「はい。知ってますよー。」

ニツコリ（*^ ^*）

「じゃあ、何しに来たの？」

殺気を向けられた。

「眠りを妨げるものを排除しに？」

あくまでさわやかキャラを通す静。

最後に？マークがついたのは気のせいではない。

「そう。」

一言いって、トンファアをしまいまた眠りにつく雲雀。

「……作戦決行（にやり）」

ドン

校庭に爆発が鳴り響く。

「やめてよね。校庭でダイナマイト爆発させるの。」

静は屋上から校庭を見ていた。

雲雀はまだ寝ている。

「こっちは大変なんだから。」

ハア、とため息をつく。

〈回想〉

雲雀が眠りについたのを確認し、静はあるものを雲雀の耳につめた。

耳栓だ。

一言につめたと言ったが、これも一苦労だ。

気配を消して近づき、そして力をなるべく入れないようにして、
— 気につめる！

何とか成功したが、奇跡と言っていない。

後は起きないように願うだけだ。

〈回想 終〉

ドドン！！ ガッ！

今日、一番大きい音が鳴る。

「やっぱーい」

何がやばいつて？

静の後ろから聞こえた音↓チャキ

そう。雲雀が起きたのだった。

「あはははは。やっぱり無理でした。」

「ねえ。どうなってるの？」

静は恐怖で振り向けないでいた。

その静の首元には光る銀色の物が。

「どうなってるって聞かれても……。
見たままですヨ。（ガタガタ）」

「あれって君のクラスメイトだね。咬みこ」「ストップです!!」
……じゃあ君を咬み殺す。」

やっと振り向けた静にトンファーが向かってくる。

「ちよえすとぉー!!」

なんとかよけた静。あまりの事で変な言葉になる。

ガシャン

静のよけたトンファーは屋上のフェンスにあたり、フェンスが下に落ちる。

「ちよ、今の完・壁 顔面狙ってましたね!？」

「……咬み殺「さないでえ!!」」

その後、根津 銅八郎（55）の学歴詐称で解任になってもしかばらく、屋上では激しい（一方的な）戦いが続いたとか。

今日はひどい目にいました。

でもまあ、まだツナたちが咬み殺されなかっただけいいときましよう。

あーあ。今回はあんまりからまなかったな。

……今回も、か。

まあ、これからからみましょう。

今日も楽しかったといえは楽し……くなかったような気もする一日でした。

お母さん　お父さんへ

静

第九話 主人公、先生にひどい扱いをされたような……（後書き）

こんな駄文な小説のお気に入りが件数が10件を超えました。

ありがとうございます！

これからも駄文ですが頑張っていきますので、
よろしく願いますm（ ）mペコリ

第十話 自分の無力さ（前書き）

久々の投稿です。

やっと十話目ですか。

これからがんばっていききたいと思います。

第十話 自分の無力さ

ピーッ

校庭に笛の音が鳴り響く。

「チーム分けはおわったか？」

「あと一人です。」

体育の時間、男子は野球、女子はドッジボールをしていた。

女子は早々とチーム分けをすませ、ゲームを始めようとするが、男子は一人だけ残っていた。

「だから、ダメツナはおまえ達のチームにくれてやるって。」

「やだね！負けたくねーもん！」

全力で拒否をしていた。

今日、獄寺はダイナマイトの仕入れに行っていて、ツナはやつと平和な生活が戻ってきたと思ったが、そう簡単にはいかなかった。

「いーんじゃねーの？こっちはいれば。」

不意に聞こえた能天気というか、場に合わない明るい声。

スポーツ万能、クラスのみんなから信頼のあつい、あの山本 武だ。

そして、ツナは山本のチームに入って、やっとゲームが始まった。

カキーン

野球ボールが空高く飛んでゆく。

「いや、わりーねー。」

山本が打った野球ボールは場外ホームラン並みに飛んで行った。

よく飛ぶな！。

そう思いながら山本のことを見ていた一人の少女がいた。

静ですよ。

ドッチボールをしていたのはいいのだが、誰も狙ってくることは無く、暇なので男子の野球を見ていた。
ボーっと野球を見ていると、

「静、危ないー！！」

風華が叫んだ。

どうやら相手チームの一人の手が滑って、静の顔に向かってボールが飛んで行ったようだ。

バチーン

それなりにいい音になった。

相手チームはやばい！と思った。

風紀委員様にけがをさせるとどうなるかわからない。

しかし、静は横を向いたまま、片手でボールを取っていた。

山本の運動能力はすごいな！。　そう思いながら。

そしてそのまま、静はボールを投げた。

「えっ」

バシッ ドカッ バチッ ドコッ

静の手から放たれたボールは相手チームの内野にすべてあたり、再び静の手元に返ってきた。

音はいい音がしたが、けが人はいなかったので、勘違いをしませんように。

「すごーい！静一人で全員あてちゃった！！」

風華の声で、静は自分のしたことにきずいた。

今までは、男子の野球を真剣に見ていたため、全くきずかなかったのだ。

これを気に静に話しかけてくる人が増えたとか増えてないとか……。

「おめーのせいだぞダメツナ！」

「トンボがけ一人でやれよ！」

山本の活躍もむなく、ツナのチームはツナのせいで見事に負けた。

一人校庭に残されたツナは、帰ろっかな、と考えていた。

「助っ人とーじょーっ」

「ひどいよね、こんなに広い校庭を一人でトンボがけさせるなんて

」

「山本！？それに静！？」

上から山本↓静↓ツナの順。

「ごめん山本。オレのせいで……。」

「気にすんなって！たかが体育じゃねーか。」

「そうそう！人は誰でも得手不得手があるしね！」

静はトンボがけをしながら言った。

実を言うと、トンボを持ったのはこれが初めてだ。

その結果、静がトンボをかけた部分は土をならすどころか、ところどころ山になっている部分がある。

「たのむぜ！オレの注目株！」

静は自分がつくった土の山をならしながら聞いていた。

「最近おまえスゲーだろ？オレ、おまえに赤マルチェックしてっから。」

「最近なの？皆はツナのことを『ダメツナ』って呼ぶけど、私はツナのすごいところしか見てないから、どこがダメなのかな？って思ってたんだよね。」

あはははーと笑いながら言う。

「そっか。静は最近転入してきたばかりだもんね。」

「にしても、谷川ってすげーよな！さっきの見たぜ！よそ見してたのに相手チーム全員にボール当てるなんてよ。」

「え、そんなことがあったの？」

「ああ！ツナも静もすげーのな！」

それにひきかえ、オレなんてバカの一つ覚えみたいに野球しかやつ

てねーや。」

ふう、とため息をつきながら山本が言う。

「な、何言っただよ。山本はその野球がすごいじゃないか！」

「そつだよ！さっきのホームランすごかったじゃん！」

「それがどーもうまくなくてさ。ここんとこいくら練習しても打率落ちっぱなしの守備乱れっぱなし。」

このままじゃ野球始め以来初のスタメン落ちだ。

……オレどうすりゃいい？」

「え、え、え！？」

ツナは驚きのあまり、変な声を出してしまった。

「……………」

静は黙ってしまった。山本を助けたかったが、なんと言っているのかわからなかった。

「なんつってな。最近のツナ頼もしーからついな……………」

山本はそう言っ、笑いながらもどこか悲しそうな顔をしていた。

「やっぱ…努力…しかないんじゃないか…な。」

ツナはどうしても山本の力になりたくてそう言った。

「……。」

また、静かは何も言えなかった。もし、自分が同じことを聞かれたら、自分もツナと同じ答えを返していたと思う。それ以外、言葉が見つからない。

「だよな。」

オレもそうじゃねーかなーっておもってたんだ！

おゝゝし！今日は居残ってガンガン練習すつぞーっ！」

静は自分の無力さに悲しんでいた。何もできない。運命を変えれない。

「……がんばってね。」

静はそう言って、少しだけ笑った。

ツナと山本はその笑顔の奥にある、悲しみに気付いたのかはわからない。

静は自分がトンボをかけたせいでできた土の山を残していった。

学校が終わり、家に帰ってきた静は宿題も終わり、何もすることがなかった。で、散歩をすることにした。

と言っても、日はすっかり暮れていて、空は闇に包まれていた。

今日は、曇っていて、星や月が見えない。

そんな中をぼーっと歩いていた。

何の目的もなく歩いていた。

気づくと、並盛町にある、並盛病院の前にいた。

そこから、見覚えのある人が出てくる。

右腕にギブスをつけた 山本 武 だ。

「あ、谷川……。」

「山本……。」

右腕、大丈夫？」

大丈夫じゃなさそうなのに、思わず聞いてしまった。

「ははっ、やりすぎて骨折しちゃった。」

無理やり笑って、答える山本。

そして、沈黙。

先に口を開いたのは静だった。

「……自分の人生なんだから、自分のやりたいと思った行動をとったらいい。」

他人がどう言おうが、自分のとった行動が正解なんだから。」

「谷川？お前何言ってるんだ？」

「何でもない！！」

お腹空いてきたからかえるわ。

じゃ、また明日！」

そう言っただけで家へ帰った。

翌日

山本が屋上から飛び降りた。
しかし、ツナが助けた。

その光景を静は教室から見ていた。

「これからも大変そうだね。
リボーン」

「ああ。」

そんな会話をしていた。

そのあと、屋上のフェンスをなおすようにとイインチョウサマにめいり言われたので、なおしてから、帰宅した。

山本が自殺しかけた。

だけど、ツナが助けた。

私は見ているだけだった。

改めて私の無能さを実感したよ。

お母さん お父さんへ

静

第十話 自分の無力さ（後書き）

なんとなく、次回予告をしてみよう。

静がいつも髪の毛をくくっている、赤いリボン。それにはちょっとした秘密があった。

少しだけ、静の過去を覗いてみませんか？

第十・五話 赤いリボン

第十・五話 赤いリボン（前書き）

一か月もほっついていてすいません！！

パソ禁が出ていたもので…。

本当にすみません！

遅れたのにやっぱりggggだ…。

第十・五話 赤いリボン

今日は休日で何の予定もなく暇だったので、神様(?)と静はトラップをしていた。

へ、何で神様(?)がいるかって？

静がらも……つれてきたからだよ。

「……ダウト!!」

「うわっ!! またかよ!!」

ダウトをしていました。

そう言えば、どこかはダウトのことを『ぎぶとん』って言うんだって？

え？ そんなことどうでもいいって？

ごめんなさい。

「お前、心読めるんじゃないのか？」

「そんなことwww神様じゃあるまいしwww」

「何でそんなに笑うんだよ!」

「おもしろいからwww」

しばらく笑い続ける静。

「そういえば、いつもそのリボンつけてるよな。」

話をずらす神様(?)

「へ? ああ、このリボン?」

やっと笑いがおさまってきた。

「このリボンはね……」

今から約7年前 静の6歳の誕生日

それは、とても寒い2月のことだった。

「静！出かけるわよ！」

「ちょっとまって、お母さん！すぐ行く！」

どたどたと音をたてて階段をかけおりる、ツインテールの少女、静。

「もうちょっとおとなしくできないかなあ？」

そう呟いた眼鏡をかけた30代前半ぐらいの父。

「ま、元気が一番でしょ。」

そう言うとても若そうな母。

とても幸せそうな三人家族。

「今日はいいい日になりそうだなあ！」

「さあ、着いたぞ!」

車で移動中どうやら眠っていたらしい。

気づいたら、そこは遊園地だった。

「わあ! 遊園地!」

「今日はいっぱい遊ぼうな!」

「うん!」

そう言っただけで遊園地の中に入ってしまった。

さて、最初に静と父が乗ったアトラクションは……?」

「きゃー……!」

ジェットコースタです

「うおおおおお!!!!」

「きゃははははは!!!!」

どうやら静は絶叫系は大丈夫なようです。

それに比べて、父はダメなようです。

「ふふふふふ。」

そんな様子を母は楽しそうに見ていた。

「もう一回乗るうー!!」

「ええー!!!!ちょっと待って…。」

そんな父の願いは届かなく、もう一回ジェットコースターに乗った。

「うおおおおお!!!!」

「ふうー楽しかった!!」

「それは……よかった……。」

父はあれから、ジェットコースターに10回も付き合わされて、ぐったりとしていた。

「おもしろかった?」

はい、と静と父に水を渡しながら、聞く。

「うん!!ものすごく!!」

「もう見たくも無い……。」

「フフツ。それはよかったわ。」

「よくねーって……。」

小さな声で抗議する父。

「静、ちょっと目を閉じて。」

「へ？いいけど。」

そう言っで目を閉じると、髪のをいじられている感覚がした。

「はい、もう開けていいわよ。」

そう言われて目を開けると、鏡に映った自分の顔があつた。

その髪のもには、赤いリボンが付けられていた。

静は、以前からリボンを欲しがっていた。

しかし、そのことを一度も親の前では口にしなかった。

「え、なんで？私の欲しかったものを……？」

「ふふふつ。……が教えてくれたのよ。」

「えっ！……が！？」

そういえば、前にそんなこと話したっけ？と思いだした。

「ありがとっ、お母さん！お父さん！……ってあれ？お父さんは？」

「……に連れられて観覧車に乗りに行ったわよ。」

「いつの間に……。」

その後も、暗くなるまで遊び続けた。

「……ってわけ。」

「なるほど。で、……って誰？」

「……わかんない。思い出せない。」

その顔は、決して嘘をついている顔ではなかった。

「そうか。誰なんだろうな？」

「さあ？ 思い出せないくらいだから、誰でもいいんじゃない？
わお、私ってひどーい（　　^^　　）」

そう言つて、笑いながら自分の部屋にUNOを取りに行った。

ダウトは静の圧勝で終わりました。

「やはり覚えてないんだな。自分のーの存在を……。」

そのシノの声はどこからか入ってきた風の音でかき消された。

第十・五話 赤いリボン（後書き）

初めての番外編です。

意外と楽しかったです。

これから番外編は十話ごとにしたいと思います。

第十一話 委員会は辛いんです。（前書き）

お久しぶりです。

クラブが最近とてもつらいです。

そんな話は置いといて。

久しぶりに書いたので、性格が変わっていたりするかもです。

これから固定していこうと思います。（これからかよー!!）

あと、サブタイトル。

最近まったく関係ない。

第十一話 委員会は辛いんです。

暑いんです。

→第一声がそれで大丈夫なのでしょうが。

現在、私は、学校が、終わり、商店街に、来て、います。

やけにくぎり多いですな。

暑いんです。歩き疲れたんです。

…一人二役は疲れる。

なんでこんな暑い日に商店街にいるかと言うと、

〈回想〉 放課後・屋上

「これ買ってきて。」

風紀委員長様にそう言われて渡された紙には、

・ボールペン 100本

・鉛筆 100本

・コピー用紙 100枚

と書かれていた。

「あの、もしかして、自腹ですか？」

「……。」

「寝ないで下さいよ！」

く回想 終く

結局副委員長の草壁さんに「自腹です。」とはっきり言われました。

う、財布がピンチだぜ……。

と、思いながら買い物が終わった後の財布を見ながら歩いていると……。

前方に銃を構えているスーツ姿の赤ちゃんが！！

「……この街には警察がいないのかな。」

と呟いて、その光景を眺めていた。

その後、同じクラスの笹川 京子がなんとかおさめたようだ。

とりあえず、ほつといていいか。と思ったので、大人の男の人でも持てないような重さの買い物袋を軽々ともって、学校へ戻って行った。

て言うか、その重さにたえている袋もスゴイネ！！

「お疲れ様です、静さん。もう帰っていいですよ。」

と、草壁さんに言われたので、帰ることにした。

ついでに交番を探してみると、学校からずいぶん離れたところにあった。

爆発が起きても少々ばれなさそうではあった。

今日は並盛中の、並盛町の安否について考えてみました。
銃刀法違反で捕まることはなさそうですが、いざ何かがあると、
かなり対応が遅れそうです。

ま、その時は雲雀サンにと思ってしまう自分が怖いです。

お母さん お父さんへ 静

「次の日」

朝早くから委員会のために学校に行つて、学校を見回りして、町内の見回りを命令されました。

が、めんどくさいと言う思考が働いたので、家に帰ることにしました。

「一回……。」

自分の部屋で本を読みながら数える。

「二回……。」

何かというと、爆発がした回数。

「うるさい。ウルサイ。五月蠅い。はあ。お向かいさんにつるさい子供が来たみたいだね。」

ぴつたりと閉じた窓の外で倒れている子供を見ながらつぶやく。

「子供はまだ大丈夫なんだけど、あのウザさはちょっと……。」

と、呟いて本を読むのを再開しようとする。

『忘れてーしまうだろう』

肩に積もる悲しみは 流れる星の手にだかれー』

どこからかREBORN!のOPの《88》が……!

メールの着メロです。

見ると……

f r o m 雲雀サン

件名

本文

何さぼってるの。

- - - E N D - - -

「WOW!ばれた。て言うか、私のメアド教えたっけ!?!」

と、同時に玄関のドアが開く音がする。

「……私、鍵かけたよね。」

思わず自分に問いかけた。

階段を上がってくる足音がする。

(静の部屋は2階です。)

静は急いでベットの下からこんなこともあるつかと用意しておいた靴を取り出した。

足音が近づいて来る。

静は急いで靴をはき、窓を開けた。

部屋のドアが開いた！！

静は窓から飛び降りた！！

静香選手 着地10・00点

「よしっ！」

静香選手、ダッシュです！

雲雀サン、窓から飛び降りました！

「って、土足で上がってたんですか！？」

それと、作者！変なナレーションはいいです！」

あ、そうですか。すみません。

「それより、助けてー！！！」

その後、並盛神社まで逃げたけど、追いつかれて強烈な一発をくらった。

「お疲れ!!」

「いたつ。お疲れじゃない! シノ! !! いったーっい!!」

「まあまあ。一発で済んでよかったじゃん。ほい、薬。」

そう言っただけ渡された薬は紫色でとてもなく危険な匂いがしていた。

「これをぬれと...?」

「見た目と匂いは最悪だが、効き目はばつぐんだぞ!!」

「……（汗）」

「んじゃ、俺は仕事があるので戻るわ。じゃーな」

そう言ってシノは消えていった。

しぶしぶつけた薬のおかげで痛みはひいたとか。

ちなみに、向かいの家では、今日だけで4回爆発した音が聞こえたそうだ。

シノの作った怪しい薬が意外と効きました。

すごい意外です。

あー、風紀委員いつまでやるのでしょうか……。
やめたいけどそういう訳には……。
どうしよう……。

お母さん お父さんへ

静

第十二話 神の便利な機能その？（前書き）

ずっと更新してなくてごめんなさい！

そして短くてごめんなさい！

さらにaaaaaでごめんなさい！

ポソ禁やらテストやらいろいろありまして……。

いろいろとごめんなさい！

第十二話 神の便利な機能その？

早朝 4 時

静は目が覚めた。

最近では、目覚ましがなくても起きれるようになってきた。
まったく、慣れとは怖いものだ。

……と、思いながら遠くを見つめていた。

「何かっこつけてんだ。全然かっこ良くないし。」

「わぁっ！！勝手に現れないでよ、シノ！女一人暮らしなのに！！」

いつの間にかシノが後ろにいた。

その姿はいつものパーカー & ジーパン姿ではなく――

「それ、並中の制服じゃない？」

「そうだぞ！今日から俺も並中の生徒だZO」

「……はああああっ！？」

「ちなみに、お前の義兄て言う設定ね。」

「iiiiiiiiiiiっ！？」

「もう一個言っと、お前と同じクラスね。」

「……叫ぶのつかれた。」

静はそう言っただけ息をついた。

「て言うか、神様(?)なのにひまだね。」

「(神様の後に?がついているような……。)ふっふっふっ。神には便利な機能がついているのだよ。」

「何!?その笑い方!!キモッ!!」

「(泣)」

「で?便利な機能って?」

そう静が聞いた瞬間、肩を誰かにたたかれた。

シノは目の前にいて、他には誰もいないはずなのに。

静が後ろをふり向くと、そこには……

いつものパーカー&ジーン姿のシノがいた。

「へ?」

確かに目の前にいたはずなのに。

そう思つて向きなると、並中の制服姿のシノがいた。

「これぞ神の便利な機能、その？だ！！」

そう、制服姿のほうのシノが言った。

「……分身？」

「「そんなところだ！」」

今度は二人とも答えた。

「てか、その？つて……。その何まであるの？あ、二人もいらない。」

「その？ぐらいまでだ。じゃ、パーカー＆ジーン姿シノは、仕事に戻ってもらうわ。」

そう言つて、制服姿のシノが指を鳴らすと、パーカー（略）は白い煙と共に消えていった。

「……で、そろそろ4時半だが行かなくていいのか？」

「げ、やばいかも。」

「じゃ、行くぞー！！」

「え、ちょっとー！私まだパジャマなんですけどおー！！」

身支度をして、家を出た。

「ダッシュ」

「何故　が付く？」

「気分だよ！！てか、何でついて来てるの？」

「え、だって挨拶に来るように言われてるもん。」

「……まさか。」

「Yes！！そのまさかだぜ！！風紀委員に呼ばれた。」

「……お疲れ様です。」

そう話している内に学校に着いた。

「君が転校生の谷川紫^シ？」

「はい！そうです！」

なぜか敬語で話している。

「静の義兄だつて？……じゃあ、君も
咬み殺しがいるのかな？」

「……はい？」

二人の声が見事にはもった。

次の瞬間、ものすごい殺気が感じられた。

「はいシノさん、提案です。」

「なんだ？」

「逃げましょう。」

「ナイスアイデア！！」

そういつて二人は風紀委員しくない学校内で逃げ回った。

「もう、鬼ごっこかぬるものじゃない！！」

「毎日こんなのやってるのか。大変だな。」

結果発表！！

二人ともグラウンドで見事にぶっ飛びました。

ご愁傷様です。

第十三話 転校（前書き）

お久しぶりです!!

死んでないです
↑

パソ禁がきつくなったり、クラブがきつくなったりです…。

一回親に内緒でこっそりやろうと思ったら、パスワードがあって、それを解読したけど、マウスが付いていない!!

という、まさかの事態があったのです。

えー、お久しぶりだけど、文才変わらずggggです（キラッ

すみません!!

第十三話 転校

「今日は転校生が来るぞー。」

先生がそう言った。

「なんか、最近転校生多くない？」

「ハハッ、確かにな!!」

「……。」

「あれ？静、どうしたの？」

静は机に伏せていた。

「んー。実はさあ、その転校生さあ……。」

そういった時、転校生が入ってきた。

「谷川 紫です。谷川 静の義兄です。よろしく!!」

そう言ってにこっと笑った。

「義兄？…似てないね。」

「いやいや、実の兄弟じゃないし。」

今、休み時間で、紫の周りには静とツナと山本と、ちょっと離れたところにいる獄寺以外のクラスメイトが集まっている。

で、質問攻めにあっている光景を3＋1人で見ている。

「髪の毛きれいな金色だねえ！」

「ありがとう。これ、地毛なんだ。（ニコ）」

そんな感じで。

「なんかむかつく。」

「どうしたの？ 静。」

静の小さな独り言をツナは聞き取った。

「んー、いや。なんかあのさわやかな笑顔がむかつく。」

「あはははは。」

第十三話 転校（後書き）

え、短い。

ごめんなさい！！

がんばって次話早く出しますからあー！！

第十四話 ナイフ（前書き）

やっぱり、更新遅れた！！

しかもggdggd。

ごめんなさい！

第十四話 ナイフ

風紀委員の見回りを終わらせて、教室に行っても誰もいないので、静と紫は校門まで来ていた。

「静、おはよー!!」

「おはよう、風華。」

「紫君もおはよう!!」

「おはよう!!」

「ねえ静、紫君!今日の放課後あいてる?ケーキ屋さんに一緒に行きたいし。」

「え、俺もいいの?あいてる!!行く!!」

いきなり目がキラキラした紫。

「ケーキ好きなんだ。以外。」

「うん。確かに意外だね♪」

「え、何?俺そういうキャラ?」

そんな風に話していると、ツナと山本が見えた。

「あの二人仲イイよね。」

「友達少ない人はああいう自分から話さなくても、話題を作ってくれる人がお似合いなんだよ。」

とか、話しているとどこから殺気が……。

それは静に向けられるものではなく。

「あ、山本が沢田のことを叩いた。」

「わお、殺気が増したwww。」

「なにその『わお』誰かの真似か？笑えないぞ。」

「??？」

風華は話についていけないようだ。

それから、放課後。

色々あつて、まあ、ナイフが飛んでいます。

「どうしたら、こうなるのよ……。」

ちなみに、風華は帰り、静と紫は木の近くで見学していた。

「おおー。山本いい動きしてるな。」

「……本当に一般人なの？」

そんなことを話していると、こっちに向かってナイフが一本飛んできた。」

「危ない!!」

静は動かなかった。いや、動けなかった。

思い出したのは、前世の自分の最期。

約束を守れなかった、哀れな自分の、最期。

「おいつ!!」

ナイフが静に突き刺さる直前に、紫は腕を引っ張り、助けた。

しかし、少しだけすれて、眼帯のひもが切れ、目の横から血が出ていた。

静は震えていた。

それにツナたちは気づかなかった。

けど、リボーンは気づいていた。

リボーンは山本と同時に、静の反射神経も試した。

その結果、静が震えている。

どういうことが分からなかった。

聞こうとしたが、今は山本の入ファミリー試験のほうが大事だ。

先に終わらせよう。そう思った。

そして、試験が終わった時には、静たちは消えていた。

どうやら、家に帰ったらしい。

しかたないから、家に行こう。

そう思ってリボーンは、静の家に向かった。

第十四話 ナイフ（後書き）

そういえば、最近本文で、

静がお母さんとお父さんに書いてる手紙的なものは出てきてませんが、

一応毎日つけてるらしいです。

書くのめんどくさ（殴

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9243q/>

～ 8人目の守護者 ～

2011年10月19日23時12分発行